
もし幼馴染がオレの書いた自作エロ小説を読んだら

ライムペンギン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もし幼馴染がオレの書いた自作エロ小説を読んだら

【Nコード】

N5290Y

【作者名】

ライムペンギン

【あらすじ】

タイトルが全ての作品です。

せっかく登録したので、過去に書いた作品を投下したいと思います。

家に帰ると幼馴染の紅子がいた。

「おわあ！？ なにやってんだお前っ！」

オレが驚愕するのも無理はない。

なにを思ったのか紅子は机の上のノートパソコンを開き、画面の中を食い入るように見つめていたのである。

不法侵入及びプライバシーの侵害……これは立派な犯罪だ。

「勝手に人の部屋に上がり込んで勝手に人のノートパソコンを覗いていますけど、何か？」

「わあい！ 的確な状況説明ありがとー。でも、できればもう少し悪びれて？」

「ときに憲明。男のノートパソコンにはえっちな画像が入っているものだ、おばあちゃんから聞いたのだが……」

「えっ、おばあちゃん何言ってるの！？」

「私はそれがどうしても信じられなくて……ウチの憲明に限ってそんなことはないだろうって信じてたのだが……」

「……………」

これはまずい。

汚物でも見るかのような眼差しで睨みを効かせる紅子。これはオレも覚悟をしておいた方がいいのかもしれない。

紅子に言われるまでもなくオレのノートパソコンにはえっちな画像がたくさん入っている。

その量、およそ13ギガや！

「憲明、これはどういうことかな？」

どこだ。

どこまで突破された？

オレ秘蔵のエロ画像は三つの階層に分かれている。

第一階層は一般・グラビアアイドル画像。

この階層は言わば撒き餌だ。

万が一、他人に見られてもいいように、わざと見つけやすい位置に置いている。趣味というより、こっから下の危険画像たちをカモフラージュする意味合いが強い。

第二階層は三次元・一八禁画像。

この階層はわりとガチで見られたくないエリアだ。

ノーマルからアブノーマル、素人投稿から引退した幻のAV女優まで多種多様に取り揃えている。マニア垂涎の逸品さ。

第三階層は二次元・一八禁画像

この階層は一般人に見られたら失禁しかねない、危険度120%のエリアである。

才気あふれるクリエイターたちが生み出した、妄想・幻想ラビリンス。東京都条例に全力で引っ掛かりそうな危険画像で溢れている。

ところが。

紅子がオレに向けたのはそのどれでもなかった。

幻の第四階層。

見られた瞬間、舌を噛み切って死ぬ覚悟を抱かせる、妄想と気の

迷いに満ちた『自作エロ小説エリア』だった。

「お、お、お、おい……まさかそれ、読んだのか？」

「……興味深く読ませて頂きました。特にこの『オレの幼馴染がエロかわい過ぎてボクもう我慢できない』って、……なんなのこれ？ なぜタイトルからして既に一人称が統一されていないのだ？

バカなのか？」

「……………」

終わったー。

オレの人生に終了のホイッスルが鳴り響きましたー。
よりにもよってそれかよ。

『オレの幼馴染がエロかわい過ぎてボクもう我慢できない』（公式略称オレボク）はオレが紅子に対して抱く邪な思いを文字世界に落とし込んだ力作である。

なにがヤバいって、起こるイベントは完全にフィクションだが、登場人物の名前は全て実在の人名で構成されていることだ。

文庫本サイズにしてそのボリュームは七巻相当までであるが現段階で一般書店に流通する可能性は皆無である。

最初はほんの出来心だったんだ……けど、上手くいかない現実に嫌気が差して仮初めの世界に浸ってしまっ……気付いたときにはこうなってしまった……。

しかし、ここは命に代えても誤魔化さなければ……オレの信用は撃墜されてしまう！

「いやはや、知らなかったよ。憲明は私のこと、こんなにえっちな目線で見えていたのだな……」

「ち、違うんだ紅子！ これはそう、モチベーションの問題で！ 全部フィクションなんだ！ 登場人物の名前を実在の人物に置き換えた方がキャラに愛着を持てると思うか……」

「ほー、じゃあこの作品に出てくる『高槻紅子さん』は、私とは何の関係もない赤の他人なのだな？」

「当たり前だろ！」

「でもおかしいな、こっちの紅子さん……なぜスリーサイズまで現実の私と一緒にのだろう……」

「せ、設定集もか！ 公式設定集の方まで読んだのか！」

『オレの幼馴染がエロかわい過ぎてボクもう我慢できないコンプリートガイド』は、登場キャラの丸秘エピソードや作者と（脳内）編集の対談など多岐に渡るコンテンツで構成されたファン待望の一冊である。

「どうして憲明が私のスリーサイズについて知っているのかは触れないでおこう………見損なった」

「……………」

見損なった……か。

紅子の一言はオレを奈落の底に突き落とすのに十分なものであった。

「……ヘタレにもほどがあるだろう。妄想の世界で満足しないで、現実の私にも手を出せばよいのに」

「へ？」

なにかいま、とんでもない発言を耳にしたような……。

「なあ、いまなんて……」

「あー、もうじれったい！ この朴念仁！」

「……………ッ!？」

その瞬間、信じられないことが起こった。

綿飴のように柔らかい紅子の唇が——オレの唇を塞いだのである。なんとも形容しがたい不思議な高揚感に包まれる。

ファーストキスはレモン味なんていうけれど、紅子とのそれはもっと甘い——例えるのなら一流パティシエが作るロールケーキのような甘さであった。あまりの糖度に頭がハゲてしまいそうである。

「……よ、ようやく気がついたか？ 私の気持ちに……」

頬を桜色に染めつつ上目遣いでこちらを見てくる紅子。

「ああ……」

「……私だって考えていることは憲明と同じなのだよ……はしたない幼馴染みは嫌いか？」

紅子の体温が異常なくらい上昇しているのが分かる……それはオレも同じか。

ああ、可愛いよ紅子。

体をくねらせて頬に羞恥の色を滲ます幼馴染にボクもう我慢できない！

「……………なんだこれは」

家に帰ると幼馴染の紅子がいた。

「おわぁ！？　なにやってんだお前っ！」

オレが驚愕するのも無理はない。

なにを思ったのか紅子は机の上のノートパソコンを開き、画面の中を食い入るように見つめていたのである。

「いや、ついに憲明との関係について見つめ直すときが来たのかな、と真剣に考えていたのだ……なんだこの『もし幼馴染がオレの書いた自作エロ小説を読んだら』ってエロ小説は」

「そそそそ、それは！？」

「というか必要だったのか？　最初の階層のくだりは必要だったのか？」

「虚構の世界にも一部、現実の設定を織り交ぜることで物語にリアリティが……」

「そんなこと知るか！ 金輪際、半径五メートル以内に近づくな。きもいから」

「……………はい」

長めのポニーテールを翻し紅子は家を後にした。

ははっ、やっぱり現実は上手くないかないや。

さてと、オレボクが続編でも書くか…………。

はあ…………。

(後書き)

初投稿です。

感想をもらえたらとても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5290y/>

もし幼馴染がオレの書いた自作エロ小説を読んだら

2011年11月16日03時22分発行